# アペニンの農村景観の変貌

竹内啓一

## 1　はじめに

以前に一連の論考において，イタリアの若干の地域における農村景観形成の歴史的条件を考察し（竹内　1963，1964，1967，1974），また，そのようなイタリアの農村景観の類型化の試みをおこなった（竹内 1965，1968）。この報告は，これらの論考を継承するものであるが，アペニンの山地および丘陵地という生態的条件による枠組みを設定し，また，第二次大戦後のイタリアの社会・経済的発展のなかでの農村景観の変化の意味ということにも焦点をあてて考察をおこなうことにする。

ここで農村景観というのは，農業地理学や，集落の形態・成因論的研究（morpho-genetische Forschung）の伝統のなかで形成されてきた概念であって，農地（耕地および放牧地），森林，水路，道路，広場，住居その他の建造物など村落の形態をかたちづくる構成要素の総体を意味するが，この概念の有効性は，形態分析による形態そのものの成因と，形態の機能ならびに，形態諸要素間の機能的関係の解明にある（Jäger 1969　14-15，Hard　1973 156-159，Nitz　1974，Wirth　1979　95-96）。

農村景観の形態・成因論的研究およびその類型論の伝統は，北西ヨーロッパのフィールドを対象にしてはぐくまれたものであって，世界のその他の地域に，そこにおける研究から得られた諸概念を適用するのにさいしては，厳密な吟味がまずなされなければならない。極端な，しかしわかり易い例をあげれば，openfield, enclosed field という対立概念を世界のあらゆる農業集落に関して用いようとすれば，これらの概念は，まったくの形態を示すだけの，そこにある社会学的，成因論的な含意をすべて欠落させたものになってしまう。形態の共通性だけから，その社会的（または社会学的）そして成因論的意味を比較検討することが，まったく無意味になるほどの多様な openfield や enclosed field が世界には存在するからである。しかし北西ヨーロッパと同じ農耕・牧畜結合農業文化（竹内　1969）をもつ南ヨーロッパあるいは地中海地域についてならば，たとえばopenfield の成因論的比較が意味をもつし（de Planhol 1958，1959），その比較が，openfield という概念の意味を厳密にし，その有効性を高めることになるであろう。

ヨーロッパの集落史，集落地理学に関する概念・用語の比較検討が本格的になされるようになったのは 1950年代に入ってからのことである。このような比較研究がおくれた第一の理由は，19世紀以来の学問研究が，民族国家ごとの制度的枠組みのなかで，それぞれ独自な，しかしかなり孤立したナショナル・スクールをかたちづくりながらなされてきたことにある。さらに，集落に関する用語・名称が，ヨーロッパの諸言語によってちがっているし，また，おなじ用語が用いられても，国や地域によって意味内容にずれのあることが多いという事実も，これらの用語の比較検討をおくらせてきた理由としてあ

げられる。簡単な例をあげれば，英語の village，hamlet という言葉が，ドイツ語の Dorf，Weiler という言葉にどこまで対応するのかということ，さらに英語の village，hamlet とフランス語の village，hameau とは必ずしも同じものを意味しないということが検討されなければ比較ははじまらないのであるが，この種の検討は各国において村落についての研究がかなり深められ，また，国境を越えて研究の交流がなされるようにならなければ不可能である。このような条件が1950年代になってようやく実現したのだと言うことができよう。研究の国際的な交流の場として，1957年ナンシーで「農業地理学と農業史」というテーマで国際的シンポジウムが開催されたのにはじまって，現在にいたるまでヨーロッパ各地で，ヨーロッパ各国からの研究者を集めて農業史や，農業集落あるいは農村集落に関する国際研究集会が何回か開催されてきた。[(1)] しかし，1960年代においては，これらの会合への地中海地域諸国からの出席者は非常にすくなく，1970年代に入って，ようやく地中海地域の農村景観を，北西ヨーロッパのそれと共通のタームで比較検討しようとする動きがでてきた。1971年3月にエックス・アン・プロヴァンスの地中海研究地理学センターが主催してマドリッドで開催した地中海諸国の農業地理学に関するシンポジウムは，フランスの研究者を主とするものではあったが，このような関心にそった研究に大きな刺戟を与えることになった（Leandro 1971）。[(2)]

イタリアの農村景観については，従来イタリア人研究者の関心は，もっぱら農家形態の地域性にむけられ，集落を構成する諸要素をそれらの機能的連関と成因に注目して分析するという研究は非常にすくなかった。Gambi（1958，1972，1975）などのかぎられたイタリア人研究者が，全ヨーロッパ的次元での比較研究のなかでイタリアの農村景観の特色を位置づけようとしてきた他には，Desplanque など何人かの外国人研究者が，そのような関心から研究をすすめているのが現状である。

イタリアの農村集落のタイポロジーを，大きく，北部，中部および南部のそれに分けて考える以前の筆者の試み（1965）は，明らかに Sereni（1961）の仕事に影響されたもので，経済史的な視点にもとづくものであった。基本的な枠組みとして，ポー川流域平野の土地改良と牧草栽培に特色づけられる北部農村，混合耕作と分益小作制に特色づけられる中部農村，そして小麦作―― 放牧の粗放的土地利用と果樹栽培――灌漑農業の集約的土地利用とがするどいコントラストをなす南部農業という分類は，イタリアの農村景観の三大類型を示すものとして意味を持つのであるが，旧教皇領であるエミリア・ロマーニヤの平野部の農村がはたして中部農村のカテゴリーに入るかどうか，リグーリアの山地・丘陵部の農村は北部なのかどうか，また，アブルッツォ，モリーゼにまでひろがっている混合耕作・分益小作制農業をどのように理解するべきか，といういくつかの具体的問題を考えようとすれば，上記の北部農村，中部農村，南部農村という類型が，なによりもイタリアの農村景観の主要類型なのであって，厳密な意味での地域類型ではないことを確認せざるをえない。その居住の歴史は平野部よりはるかに古いが（Braudel 1966），傾斜地という生態的条件，山地であるが故に近代以降農業限界地になったという性格などは，北部から南部にいたるまでのアペニンの農村の形成および近年における変貌に共通点を与えている。北部農村，中部農村，南部農村というカテゴリーが，具体的にアペニン各地においてどのようにあらわれているかということを検討することも必要であろう。本稿は，このような観点から，いくつかのトピックをスケッチしようとするものである。

## 2 開放耕地の問題

北西ヨーロッパの農地制度（field system)として，その地域的多様性にかかわらず，二圃制または三圃制と結びついた普遍的カテゴリーとしてオープン・フィールドなる概念を強調したOrwin夫妻の古典的労作（1938）以来，それは，北西ヨーロッパの主穀農業における耕圃制との結びつきにおいて，すなわち単に形態によってではなく，むしろ機能によって定義されてきたのである（Baker and Butlin 1973 621－624）。これをより広く旧大陸西半分の農牧混合地域全体において有効な概念として用いようとしたのが de Planhol であって，彼にあっては，開放耕地を成立せしめる背景として共同放牧ということが重視されたのであった。また，開放耕地が形成される過程としては，かなりの大集団が，集団的に定住化し耕地を開く場合と，個人的または小集団による定住化が，むしろ閉鎖耕地の増大という形で進行し，共同放牧の必要から二次的に開放耕地が成立する場合とがあり得るが，後者の方が一般的であると考えられた（de Planhol，1958，1959）。地中海地域とくにアナトリアにおける観察にもとづく de Planhol の問題提起は，二年輪作が一般的であり，また耕圃制の存在の確認が史料的にも限定されているアペニンにおける開放耕地の研究に大きな示唆を与えるものである。

開放耕地が，放牧と耕作とを物理的に分離することによって成立するのであれば，開放耕地は，形態の上からは「個々の耕地片（parcel)が，生垣または石垣・土手などによって囲い込まれていない」ということしか意味しないことになり，家畜の侵入を防ぐために耕圃，耕区が囲いこまれるのは当然であるから，農村景観のなかにおける生垣，石垣，土手などの囲いの密度とは関係ないことになる。囲いの密度を規定するのは，耕圃，耕区など，耕地の集合の規模である。フランス西部の閉鎖耕地の卓越する地域における méchous，gaignerie など，あるいは一般的にインフィールド・アウトフィールド・システムのもとにおけるインフィールド（Uhlig 1961）も開放耕地と呼ぶことができるのである。開放耕地を形態に関してこのように定義すると，アペニン山地における開放耕地に関して，二つの大きな問題が生じる。一つは，樹木の植えられている耕地に関する問題であり，もう一つは大土地所有のもとにおける農地制度の理解に関する問題である。

中部イタリアの平野部および谷底部，あるいは低い丘陵地帯にひろく見られ，歴史的には分益小作制（mezzadria）と結びついて成立した混合耕作とちがって，中部イタリアの山地あるいはアブルッツィ以南においては，混合耕作がなされていても，農地の利用が共同体的規制の下におかれ，樹木の下が，家畜の共同放牧，あるいは共同通過（parcours）に供される場合が多かった。アーモンド，場合によってはオリーブの木が個人的に保有されていても，地上で一年生作物が栽培されていない期間における放牧・通過は可能だからである。アブルッツィの山地で，アーモンドの植えられている耕地がしばしばveceと呼ばれる単位に分けられていたことは，19世紀後半の Jacini 報告にも記されているが（Vol. XII. fasc. III. 55－57），veceという言葉は，フランスにおけるsaisonと同様，明らかに輪作の単位を示すものである（Farinelli, 1975）。ここにおける植樹が，何時頃なされたものなのか，18世紀以降における人口増大にともなうものなのかどうかは明らかにしえないが，休閑地になっているveceを通って，夏には，家畜が山地にある永久放牧地（campo）にむかったのである。vece が複数の農民保有地からなっている限り，植樹されていても，これは開放耕地と考えなければならないことになる。同様の事例を Desplanques（1969 491－492)が，

ウンブリア山地についても報告している。

インフィールドを一般に開放耕地と見做し，そこにおける割替制が何時まで存続したかということを問わないことにすると，そこに葡萄が植えられていようが，野菜が栽培されていようが，インフィールドが全体として家畜から防禦されているかぎり，論理的にはこれを開放耕地と呼んでさしつかえないことになる。他方，地中海地域の石灰岩山地においては，ポーリエが，その肥沃で耕作しやすい土質のために，集落史的にみればインフィールドの役割をはたしたことが多い。これを開放耕地と呼ぶのは，形態の上からは困難であろう。さらに葡萄に関しては，機能にも，それが植えられているかぎり，毎年春から秋まで家畜の通過が困難になるから，葡萄が植えられた時からは開放耕地ではなくなったと理解すべきであろう。

Orwin 夫妻のラックストンに関する研究が示しているように，開放耕地の，自由農民（free holders）をもふくめた農民による共同体的利用は，マナーの領主権力の指導・管理によってはじめて可能であった。この場合，近代的土地所有の場合とちがって，領主と農民との関係において，農民ごとに契約条件が変り得る余地はなかった。アブルッツィをふくめて，イタリア南部において，一つの大土地所有が，コムーネ全体あるいは複数のコムーネにわたる場合，19世紀後半にいたるまで，大土地所有者と農民との関係が，この点で前近代的である場合がしばしばあった。教会財産が封建制の廃絶以降，とくにイタリア統一以後に処分され，大土地所有者の手に帰した場合には，放牧などに関する伝統的共同利用権がなくなる場合が多かったが，大土地所有家族が没落することもなく19世紀後半まで続いた場合，慣行的共同利用権がそのまま続いた場合が多く報告されている。これは，Rossi - Doria のいう農民的ラティフンディウム（1944）が今世紀になってから展開されている地帯に多いのであるが，このような農村景観において開放耕地を確認するためには，いくつかの問題を吟味しなければならない。すなわち(1)封建制の廃止（半島部においては1890年代，シチリアにおいては1810年代）以後における農民身分の検討，とくに彼らが個人としてでなく，隷属的身分にあるものの総体として取り扱われていたかどうかということ，(2)農民社会内部における共同体的慣行の有無と平等原則実現の程度，(3)以上の二点と関連して，形態的に耕地片すなわち農民の保有単位が石垣で囲いこまれている場合，その囲いこみが何時なされたかということの吟味。この点に関しては，19世紀を通じて穀作が拡大し，また耕作のためには耕地内の石をのけてどこかに捨てなければならないイタリア南部の内陸部において，石垣は，家畜に対する防禦を第一目的に必ずしもしないで，石の捨て場として容易に作り出されたことに留意しなければならない。

ここでアペニン山地における封建的土地所有の全貌をえがき出すことはできないが，さしあたって問題になる南部については，土地利用の状態，都市ブルジョアジーによる土地所有の進行状態，放牧経済の比重の三つが，19世紀以降における開放耕地の存在を規定する重要な条件になる。南部アペニン山地において，19世紀における土地制度の変化は，どこにおいても農法の革新をほとんどともなうことなく進行したが，それ以前の小麦作と休閑地が交代するローマ式農法は，それまでに，場所によってちがいはあるが，かなり変化をこうむっていた。休閑地に代ってトウモロコシ（春作，イタリア南部では飼料に用いられることはほとんどなく，もっぱら食用である）やウマゴヤシ（冬作）が入り，時には，野菜をも混ぜた多年輪作が入ってくると，土地利用における個人主義が強く表面に出てきて，集団的土地利用規制が困難になってくる。トウモロコシをはじめとする新作物の導入

は，地中海地域においては，裸の播種地(seminativo nudo）の耕地形態を残しはするが，アーモンドの植樹などよりも，はるかに強く，開放耕地制を崩壊せしめる契機となったようである。その際，耕地片を仕切る石垣は非常に低いものであっても，それをもはや開放耕地と呼ぶことができないのは，Villari（1961）が報告したバジリカータ内陸部の事例からも読みとることができる。村落共同体（università）の大土地所有者および王権に対する敗北はマッセリーアの存在するシチリアの内陸部ではもっと明白である。ここでは，農民は石垣のなかに分断され，さまざまな次元での利用権（usi civici）がはっきりと分離される。その一例は，Romeoが，その著書(1970)の巻末にかかげてくれたモニカダ家所領に関する史料からもはっきりと読みとることができるのである。これに対して，アブルッツィ山地に関しては，さきにふれた，Jacini 報告からも，19世紀後半において小麦とトウモロコシの輪作が耕圃制をとっていたことが知られるのであるが，これは，19世紀後半においても牧畜経済の比重が高かったアブルッツィ山村におけるparcoursの必要から説明されるべきではないだろうか。Farinelli(1975)が報告しているように，ここにおいては，多様な開放耕地が，高度にしたがって見事に規則的な垂直的分布を示しているのであるが，この垂直性は，ラクイラ盆地におけるブルジョワ的土地所有のもとにおける商品生産的農業の進展ということから，高地山村におけるトランスヒュマンスの卓越ということにいたるまでの経済的諸事実が，その地形条件から，たまたま垂直的に配列するということを意味するものであろう。ともあれ，たとえば，カッペリ家の所有地は，第二次大戦期にいたるまでアブルッツィ南部からプーリア台地のマッセリーア地帯にまで及び，その所有地のなかでは，村落次元での共同放牧から，トランスヒュマンスの移動路（tratturi, tratturelli）の管理までが，16世紀以来の慣習とほとんど同じかたちで今世紀初頭においてもなされていたのである（Sprengel 1971)。ただ，ここで予察的に問題を提起しておけば，イタリア諸州のなかで，村有地（demani comunali）が，平均的にみれば例外的に多いアブルッツィは，山地における開放耕地の存在に関して，やはり特殊であり，その特殊性は，トランスヒュマンス経済に大きく由来していたのではなかろうか。

農民的ラティフンディウムが成立した地帯は極めて単純化して言えば，地代部分の実現の困難な限界地であったことを意味する。耕地としての土地が限界地であっただけでなく，近代技術の導入による生産力発展の可能性が，そこにおける牧羊経済にはほとんどなかった。土地利用規制が，家畜に対する耕地の防禦(défence）の役割を大きく持っていたところでは，その衰退にともなって，人口流出もあったにせよ主として零細な農民的土地所有のもとで，アナーキーな農耕的土地利用が，前世紀末から今世紀にかけて展開したのであった。ところが，アブルッツィ，モリーゼ，局地的には，アスプロモンテ山地などの長距離トランスヒュマンスによっていたアペニン高山部の集落では，夏には高山部の草地で放牧し，冬には移動路を通って，ラツィオ，プーリアなど遠隔の放牧地に家畜を導いていたので（竹内 1974），土地利用規制は，家畜からの防禦よりも，むしろ放牧地の確保が目的とされた。冬の放牧地で，樹木，野菜などの集約的農業が展開されるにつれて，勿論放牧経済そのものは衰退しても，縮小したなりに，それでも夏冬の放牧地を確保するために土地利用規制は耕圃制をともないながら，残存乃至強化されたと考えられるのである。

その分布を単純にみるならば，アペニン山地における開放耕地は，19世紀にいたるまで，その本来の意味において，比較的高いところに，

大体海抜600mをこすところに残存した。南部における開放耕地が，このように，15世紀以降の牧羊経済の発展にその起源をもつとすれば，北部・中部におけるそれは，ポーリエなど石灰岩地帯に見られる小規模な耕作適地であって，耕地としての歴史はアペニンにあって，おそらく最も古いが，分益小作制のもとで混合耕作が展開された土地改良の時期にも，低地の排水による土地改良（berufica）によって特色づけられる最近200～300年間にも，自然条件の制約から，囲いこみの対象となることができなかったことに由来するのである（Desplanques 1975，Sereni 1972）。後者は，典型的なインフィールドとして，耕地の細分化が極端に進んでいるという形態的特色をもつ。そして，このような二種類の開放耕地は，それらが開放耕地として残存することになった時期は地域によって異なるが，イベニア半島にもバルカン半島にも，地中海地域においてみられる地中海的開放耕地の二種型なのである。

この二類型は，基本的にはMeynierが北西ヨーロッパにおいてなした開放耕地の二大区分（Meynier 1958, 31－33）に対応する。すなわち輪作強制のためのものと放牧のためのものである。しかし，Meynierのように，開放耕地を北西ヨーロッパ的景観の南ヨーロッパまたは地中海地域への延長として理解する必要はない。アペニン山地において，その社会経済的および自然的条件のなかに，この二種類の開放耕地は，本来的に存在する根拠をもつのである。

第二次大戦後のアペニン山地の農村景観の変貌というとき，面積的に最も大きいのは農地の耕作放棄である（Ruggieri 1976，Hugonie 1976，Formica 1975)。アペニン山地における耕作放棄は，すでに1930年代に指摘されていたが（Ciarrocca 1937），これが大規模に進行したのは1950年代以降のことである。正確な統計データは得られないが，(3) 1950年から1970年の間に，アペニン山地における耕地の減少は20％を超え，アブルッツィでは山地部の耕地の放棄率は90％を超えている（Ruggieri 1976）。永久放牧地では，利用放棄ということを確定しがたいが，放牧される家畜数が，今世紀初頭の10分の1以下(4) というような状態では，利用が放棄されていると考えるべきであろう。

アペニンにおける大規模な社会的休閑の進行は，開放耕地にかぎったことではない。後述する分益小作制の危機というかたちで混合耕作の耕地でも耕作放棄が進行しているのであるが，混合耕作地帯において問題になるのは，分益小作制の危機であって，農民的土地所有に移行した場合には，樹木を伐採して機械化した畑作農業を展開したり，逆に，葡萄の専用畑にして土地利用が集約化している場合がしばしばあるし，分益小作農の家屋（casa colonica）あるいはより大きな経営の家屋（masseriaまたはfattoria）がセカンドハウスになるのにともなって，農地もレジャー用地として新しい機能をもつようになっている例も，中部イタリアではかなりみられる。これに対して，開放耕地における耕作放棄は，なによりも，ＥＥＣ体制のもとにおいて，1880年代以来保護されてきたイタリアの小麦栽培が，北部平野部における場合以外は，その構造改善に失敗したことに由来している。農民的ラティフンディウム地帯においてのみでなく，1950年代の農業改革によってつくり出された自作農 ── そこでは，土地改良なり，機械化などの構造改善の措置が講じられたはずである ── の卓越する地帯においても，もはや農業経営が成立しなくなったのである。これらの地帯においては，1950年から1970年の間の人口減少率が，どのコムーネでも30％を超えている。耕地面積が，30年ほどの間に16乃至17世紀の状態に戻ったわけであるが，当時大量に居たであろう家畜は現在皆無に近く，放牧地および放棄された耕地における非農業的土地利用の

進展もほとんどみられない。耕地の分散および細分化，そして経営の零細化が，大規模な，ECの共通農業政策による保護の対象になるような農業経営の成立を妨げていることはたしかであるが，大部分のアペニンの開放耕地においては，19世紀においても開放耕地を存続せしめた土地条件，交通条件そのものが，これらの地域を，もはや農業限界地の外に位置づけてしまったと考えるべきであろう。

海岸とちがって，アペニンの山村は現代のツーリズム産業の発展にもあまり適していないが，冬のスキー場をかねそなえて，夏冬にツーリストを受けいれることにより，例外的に成功しているコムーネの場合，多くが共同放牧地として広大な村有地（demani comunali）を持っていることは注目される。ゲレンデおよび関連設備を建設する土地が得やすいというかたちで，村有地が新しい意味を持ったのである。

### 3　閉鎖耕地の類型

閉鎖耕地あるいは囲い込み耕地は，開放耕地に対立する概念であり，この二つの概念がMeitzen，A.から Bloch，M.をへて現在にまでいたるヨーロッパの集落研究において有効性をもち続けてきたのは，これらが，単なる耕地形態の相違を示すのみでなく，農業方法の歴史，農村文明の性格の相違，そして，二つの異なる形態の機能的関連を示すという形態・発生論的意味においてであった。地中海地域において，北西ヨーロッパの集落研究と共通する関心のもとに，閉鎖耕地を，灌漑穀作 — 牧草栽培，地中海式園芸農業（giardino mediterraneo），混合耕作の三つに分けて整理した Sereni，E.(1961)の観点は現在も有効であるが，Sereni にあっては，閉鎖耕地の開放耕地に対する対立性，換言すれば，地中海地域における開放耕地の存在意義についての考察が十分になされていなかったために，地中海世界における閉鎖耕地の存在意義が十分に示されないという憾があったのであった。

「囲いこみ」が「開放」に対して意味をもつのは，その起源に関して，もともと開放耕地であったのが何らかの理由で囲いこまれたということが確認されるか，さもなくば，閉鎖耕地の存在が，土地利用の共同的規制を排除し，家畜の耕地に対する侵入に対して個人主義的に防禦するという機能に由来していることが立証されるかする場合だけであろう。これが，厳密な，そして狭義の意味における閉鎖耕地である。閉鎖耕地の起源に関して，Meynier（1958　162－172)は，開放耕地の場合と同様に，もっぱら北西ヨーロッパに関して，二つの場合，すなわち耕地の囲いこみと放牧地の囲いこみの二つを区別しているのであるが，Gambi（1958)が指摘するように，アペニン山地においても，この二種類の囲いこみの可能性は存在した。しかし14世紀から16世紀にかけて，穀物栽培に比しての牧羊の繁栄期に，はたして共同利用権（usi civici）をどこまで完全に廃絶して個人主義的牧羊経営の拡大をなしえたかは，Gambi のように，シラ山地における法制史をおうだけでは明確にできないであろう。さきに開放耕地存続に関してみたのと逆の条件，すなわち，領主の排他的な牧羊経営が排除の対象としなければならなかったような土地保有者が存在したかどうかということが吟味されなければならないのである。領主が村落（università）の総体を囲いこんだのでは囲いこみにならないから，農村社会内部において領主に対抗する階層が成立してこないかぎり，放牧地の囲いこみを云々することはできない。

これに対して，耕地の囲いこみは，さきにのべたように，18世紀以降穀物栽培の拡大にともなって南イタリアのラティフンディウム地帯においても生じたし，都市ブルジョアジーの土地所有の進展が，土地利用の集約化をとなって進

行した丘陵部アペニンにおいてひろくみられた。いわゆる地中海式園芸(giardino mediterra-neo)は，場合によっては，新たに干拓または開墾された耕地，すなわち ex nihilo の閉鎖耕地であることもあるが，北西ヨーロッパの Wald-hufendorf のように，ex nihilo の囲いこみ，いわば広義の囲いこみは，放牧経済の役割が大きかった地中海地域では，その分布がかぎられている。多くは家畜に対して，作物と土地に合体された資本を防禦しながら発展したのであるし，ex nihilo な囲いこみであっても，防禦という機能はたえず存在する。

混合耕作の耕地は，起源からみれば，大部分が粗放な耕地または放牧地を囲いこんだものであり，耕地の囲いこみという点で，一見問題はないようであるが，Desplanques (1959 a) も指摘しているように，樹木作物の葉が，中部イタリアおよび北部イタリアで，すくなくとも18世紀末まで，かなり広範に飼料として用いられていたことを考えると，[5] ここで囲いこまれたのは，はたして農耕であったのか牧畜であったのかという問題がでてくる。エミリア地方における混合耕作において，18世紀以降樹木密度が低下したことは，一般に確認されているが，これは葡萄栽培地域の再編成ということだけでなく，灌漑および非灌漑による牧草栽培地が拡大して飼料としての樹木の役割が減少したことにもよることが推定され，そうすると，ここにおける飼料用樹木(同時に葡萄の支木)は，囲いこまれた永久放牧地と同じ運命をたどったことになる。

牧草栽培の導入にはじまる北西ヨーロッパの農業革命に匹敵する農法の革新は，地中海地域では，北部イタリアの平野部を別にすれば，樹木農業と地中海式園芸農業である。植樹のためには山地にあってはテラスを造営しなければならず(Despois，1955)，また，園芸農業のためには，灌漑設備をほどこしたり，谷底または山間盆地を干拓しなければならなかった。いずれの場合にも，土地改良(bonifica)のための大がかりな投資を必要とし，このようにして，地中海的農業革命は，とくに山地にあっては小農的技術によるものではない。これが，アペニン山地における閉鎖耕地のひろがりを限定する一つの要因であったのであり，また，混合耕作地帯における分益小作制，谷底あるいは山間盆地における大土地所有制の卓越[6]という，今世紀中葉まで続いた土地制度を支える条件にもなったのであった。

谷底あるいは山間盆地の干拓地の場合には，ex nihilo の閉鎖耕地，いわば，広義のまたは擬似的な閉鎖耕地が，さきにのべたように地中海地域としてはむしろ例外的に存在する。土地改良のされ方，その技術的条件のちがいによって，各地で，耕地形はかなり多様であるし，また，100～200年の間に細分化がかなり進んだが(たとえばフチノ湖の場合)，この場合には，新田村あるいは Waldhufendorf に似た耕地形が生じる可能性があった。土地所有者が，永代的な小作権を保障しながら農民の開拓意欲を利用しようとした場合であって，トラシメネ湖周辺では巾15～25mの耕地が200～300mにわたって湖に向ってのびており，湖水面の後退にしたがって干拓が進行したあとを示している。[7]

第二次世界大戦後，とくにイタリア経済が急速な成長をとげた1950年代以降，閉鎖耕地をめぐる社会関係は大きな変動を経験し，それにともなって，それまでにあった閉鎖耕地の形態も大きく変化した。EC体制のもとで，イタリアの山地農業が，一般に急速な衰退にむかっていることは，すでに開放耕地に関して指摘したが，植樹がなされたり，野菜栽培のための条件がすでに存在した閉鎖耕地にとっての条件は開放耕地よりははるかに良い。しかし，耕地として存続しているのは，大部分が耕地整理や土地改良が公権力の介入によってなされた所であって，

平野・臨海部と山地・内陸部とのコントラストは，現在の経済的条件に関して言えば，閉鎖耕地と開放耕地とのコントラストよりも，はるかにいちじるしい。

面積的に，アペニン山地の閉鎖耕地のなかで大きな比重をしめる混合耕作耕地についてみれば，その変化は，分益小作制の危機をともなっている。1950年から20年間に分益小作地の面積は，中部諸州において20〜40%，モリーゼ，シチリアなどでは60〜70%減少したし，分益小作農の数は⅓から¼になった。開放耕地の場合と同様，正確な統計は得られないが，1950年の分益小作地のかなりの部分が耕作放棄されている。そして，農業生産の場となっている場合には，葡萄の単作耕地になるか，多くは地主の直接経営による大規模農場 ── 機械を用いた穀物，野菜などの多角経営 ── に両極分化し，伝統的な混合耕作景観が消滅しつつある。形態的にみれば，前者は囲いこみの徹底であり，後者は，擬似的開放耕地化である。

現在の農業を分析するのにさいしては，開放耕地，閉鎖耕地という概念を対置することが，あまり意味のないことは勿論である。形態的にみれば，現在の農村の耕地形態は，この対立概念と無関係であると言ってさえよく，農民的ラティフンディウムの地帯が，小さく囲いこまれ，閉鎖耕地の地帯で，耕地整理と機械化の結果，広々とした耕地が出現しているかもしれない。しかし，以上みてきたように，現在にいたるまでの変化の過程，そして変化の方向，そして，そこに存在する集落あるいは農村社会には，アペニン山地においても，開放耕地，閉鎖耕地という概念に代表される二つの農村文明のコントラストが見出されるのである。

## 注

(1) これらの研究会は，大きく分けると集落史・集落地理学的関心から，国際的比較をしようとするものと，農業的土地利用に関する国際的タイポロジーを目ざすものとの二つの系列に分けられる。1957年のナンシー集会のあと，このグループは何回かの国際集会を続け1964年の国際地理学連合（IGU）のロンドン大会で研究委員会として発足を提案したが認められず，以後，フォルクスワーゲン財団などの援助をうけて国際的農業ターミノロジー研究グループとして研究活動を続け，1973年に一応その任務をおえ，以降はIGUの国際的地理学ターミノロジー研究委員会の下部組織として活動を続けている。現在にいたるまでの主要な集会と報告書は次の通りである。

1957年 Nancy（Géographie et Histoire Agraires, *Annales de l'Est*, Mémoire, No, 21, 1959, 452p.）

1960年 Vadstena（Morphogenesis of the Agrarian Cultural Landscape. Geografiska Annaler。Vol. XLIII, 1961, 1−328）

1964年 Bangor, Birmingham および Leicester（Jones, G. R. J. and Thorpe, H. Symposium s4a: The rural landscape and its evolution *20th International Geographical Congress. Congress Proceedings.* London, 1967. 221−229）

1968年 Wurzburg（Beiträge zur Genese der Siedlungs- und Agrarlandschaft in Europa. *Erdkundliches Wissen* Heft 18 *Geographische Zeitschrift.* Beihefte 211p.）

1969年 Liège（L'habitat et les paysages ruraux d'Europe. *Les Cengrès et Colloques de l'Université de Liège* Vol. 58 469p.）

1971年7月 Belfast（*Fields, Farms and Settlement in Europe.* Ulster Folk and

Transport Museum 1976. 161p.)
1971年8月 Budapest
1973年 Perugia (**I paesaggi rurali europei.** *Deputazione di Storia Patria per l'Umbria* Appendici al Bollettino N. 12 1975. 609p.)
参加する研究者は，この第一のグループとかなり重複しているが，第二の研究グループはIGUロンドン大会で，農業タイポロジーに関するIGU研究委員会として発足したもので，これは世界的規模で農業的土地利用に関する比較研究を目ざすものではあるが，その主要な関心はヨーロッパにおける農業的土地利用であった。このグループも1964年から1976年までの間に8回の研究集会を開き，いくつかの報告書を発表している。主要なものをあげると，
Kostrowicki, Jard Tyszkiewicz, W.(ed.) Essays on Agricultural Typology and Land Utilization. Proceedings of the Third Meeting of the Commission on Agricultural Typology. *Geographia Polonica* 19 290p. Vanzetti, C. (ed.) *Agricultural Typology and Land Utilization* Verona 1972. 448p. Reeds, L. G. (ed.) *Agricultural Typology and Land Use. Proceedings of the Agricultural Typology Commission Meeting. Hamilton, Ontario.* McMaster Univ. 1973 350p.
Vanzetti, C.(ed.) *Agricultural Typology and Land Utilization* Verona 1975 498p.

(2) この研究集会の報告は *Recherches Méditerranéennes* III *Actes du colloque de Géographie de Madrid, Les Sociétés Rurales Méditerranéennes,* Institut de Géographie. Aix-en-Provence 1972 に発表されている。

(3) 1970年のイタリアの農業センサスにおいては，耕作が放棄された耕地は，もはや耕地として数えられていないので，耕地面積を1960年および1950年センサスと比較することしかできない。センサスにある耕地のなかでもかなりの部分が実際には耕作放棄されていた。

(4) 村有地については，コムーネ当局によって調べられたデータのある場合が多いが，高度1000 mを越える山地部の放牧地で入牧する家畜数はどこでも盛時の10分の1以下である。

(5) 筆者は，かつて中部アドリア海沿岸のFanoの市役所に保存されている1829年の土地台帳に olmi da erba という項目がかなりあり，これが何であるか当時わからなかったが，これは，飼料用の楡であろう。ただ，この場合これが放牧の対象になったのか「葉刈り」の対象になったのかはわからない。また，これはイタリアだけのことでなく，現在でも北アフリカでは山羊が木にのぼって葉を食べている風景にお目にかかることがある。

(6) 大土地所有者のイニシアティヴによる大規模な土地改良が必ずしも集約的円芸農業を結果しない。マレンマ地方がその例である。

(7) 16世紀教皇国家の下で，ウンブリアの貴族が干拓権を得て干拓がすすめられた。( Desplanques 1975.)

## 引用文献


Adams, I.H.: *Agrarian Landscape Terms: a Glossary for Historical Geography.* 1976, 328p.

Baker, A.R. and Butlin R.A. (ed.): *Studies of Field Systems in the British Isles.* Cambridge, 1973, 702 p.

Braudel, Fernand: *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II.* Première Partie, La part du milieu. Armand Colin, 1966, 21-322.

Ciarrocca, V.: Gran Sasso e Montagna Aquilana. I.N.E.A. *Lo spopolamento*

*montano in Italia*. Parte VII, 1937, 85-148.

Delano Smith, Catherine: Villages désertés dans les Pouilles: le Tavoliere. *I Paesaggi Rurali Europei*. Deputazione di Storia Patria per l'Umbria. Appendice al Bollettino N. 12, 1975, 125-140.

Desplanques, Henri: Contribution à l'étude des paysages ruraux en Italie centrale: l'arbre fourrager. *Géographie et Histoire Agraires*. Annales de l'Est, Memoire N. 21, 1959 a, 97-104.

Desplanques, Henri: Il paesaggio rurale della coltura promiscua in Italia. *Rivista Geografica Italiana*, LXVI, 1969 b, 29-64.

Desplanques, Henri: *Campagnes Ombriennes Contribution à l'étude des paysages ruraux en Italie centrale*. Armand Colin, 1969, 573 p.

Desplanques, Henri: L' influence urbaine sur les paysages ruraux en Italie centrale (Ombrie). *L'Habitat et les Paysages ruraux d'Europe*. Université de Liège, 1971, 93-101.

Desplanques, Henri: Types de parcellaires dans les bassins interieurs de l'Apenin. *I Paesaggi Rurali Europei*. Deputazione di Storia Patria per l'Umbria. Appendice al Bollettino N. 12, 1975, 149-154.

Despois, Jean: Les culture en terrace dans l'Afrique du Nord. *Annales E.S.C.* 1955, 42-50.

de Planhol, Xavier: *De la Plaine Pamphylienne aux Lacs Pisidiens, Nomadisme et vie paysanne Librairie Adrien-Maisonneune*. Paris, 1958, 495 p.

:Essai sur la genèse du paysage rural de champs ouverts. *Géographie et Histoire Agraires*, Annales de l'Est Memoire N. 21, 1959, 414-424.

Dionnet, Marie Claude: Transformations des paysages ruraux de l'Abruzze maritime. *I paesaggi rurali europei*. Deputazione di storia patria per l'Umbria. Appendici al Bollettino N. 12, 1975, 155-168.

Dörrenhaus, Fritz: *Villa und Villegiatura in der Toskana, Eine Italienische Institution und ihre gesellschaftsgeographische Bedeutung*. Franz Steiner, 1976, 153 p.

Farinelli, Franco: Per lo studio dei campi aperti nell' Abruzzo montano. *I paesaggi rurali europei*. Deputazione di Storia Patria per l'Umbria. Appendici al Bollettino N. 12, 1975, 169-182.

Formica, C.: *Lo spazio rurale nel Mezzogiorno. Esodo, desertificazione e riorganizzazione*. Ediz. Scient. Ital. 1975, 173 p.

Freund, Bodo: Siedlungsgenetische Untersuchungen in der Terra de Barroso. *L'habitat et les paysages ruraux d'Europe*. Université de Liège. 1971, 145-164.

Freund, Bodo: Social Stratification and Forms of Land-use in Eastern Alentejo (Portugal). *Fields, Farms and Settlement in Europe*. Ulster Folk and Transport Museum. 1976, 138-142.

Gambi, Lucio: In margine al Primo Convegno Internazionale di Storia e Geografia Rurali. *Rivista Geografica Italiana*. 1958, 52-61.

Gambi, Lucio: I valori storici dei quadri ambientali. *Storia d'Italia*, 1972, 5-60.

Gambi, Lucio: Strutture rurali e conseguente paseistica come risultato di riva-

lità fra i campi apposti di forze sociali (Considerazioni per l'Italia). *I Paesaggi Rurali Europei*. Deputazione di Storia Patria per l'Umbria. Appendici al Bollettino N. 12, 1975, 225-236.

Gil Crespo, Adela : Colonización y transformación del paisaje agrario de Las Vegas del Guadiana. *Géographie et Histoire Agraires*. Annales de l'Est, Memoire N. 21, 1959, 233-244.

Gil Crespo, Adela : El openfield hispanico y su transformación por la concentracion parcelaria. *I Paesaggi Rurali Europei*. Deputazione di Storia Patria per l'Umbria. Appendici al Bollettino N. 12, 1975, 249-262.

Hard, Gerhard : *Die Geographie. Eine wissenschaftstheoretische Einfuhrung*. Walter de Gruyter, 1973.

Haussmann, Giovanni : Il suolo d'Italia nella storia. *Storia d'Italia*, I. Einaudi, 1972, 63-132.

Hugonie, G. : L'évolution récente de l'utilisation des sols montagnards en Sicile Septentrionale. *Méditerranée*, 1976, 3-17.

Institut de Géographie d'Aix-Marseille : *Les societés rurales méditerranéennes. Actes du Colloque de Madrid*. Recherches Méditerranéennes, III, 1972.

Jäger, Helmut : *Historische Geographie*. Georg Westermann, 1969.

Joannon, Michèle-Durbiano, Claudine-Tirone, Lucine-de Raparaz, A. : Le village dans les campagnes provençales : analyse de l'évolution récente des villages perchés. *I Paesaggi Rurali Europei*. Deputazione di Storia Patria per l'Umbria. Appendici al Bollettino N. 12, 1975, 303-316.

Klapisch-Zuber, Christiane-Day, John: Villages désertes en Italie, Esquisse. *Villages desertés et histoire économique, XI*$^{e}$*-XVIII*$^{e}$ *siècle*. S. E. V. P. E. N., 1965, 419-459.

Kostrowicki, Jerzy : Twelve Years' activity of the IGU Commission on Agricultural Typology. *Geographia Polonica*, 40, 1979, 235-253.

Lienau, Gay : Mehrfachnutzung von Land und Mischkulturen im westlichen Peloponnes als Ausdruck der Sozio-ëkonomischen Situation. *I Paesaggi Rurali Europei*. Deputazion di Storia Patria per l'Umbria. Appendici al Bollettino N. 12, 1975, 331-340.

Lopez Gomez, Antonio : La estructura agraria de la Herta de Castellón (Levante, España) *Géographie et Histoire Agraire*. Faculté des Lettres et des Sciences Humaines de l'Université de Nancy, 1959, 397-402.

Matzat, Wilhelm : Types of Agrarian Microrelief in the Plains of Northern and Central Italy. *I Paesaggi Rurali Europei*. Deputazione di Storia Patria per l'Umbria. Appendici al Bollettino N. 12, 1975, 347-358.

Matzat, Wilhelm : The Development of Settlement and Field Patterns in Lombardy Since 1720. *Fields, Farms and Settlement in Europe*. Ulster Folk and Transport Museum, 1976, 132-137.

Meynier, André : *Les paysages agraires*. Armand Colin, 1958, 199p.

Nitz, Hans-Jürgen : Wege der Historisch-genetischen Siedlungsforschung. Nitz, H-J.

(herausgegeben) *Historisch-genetische Siedlungsforschung*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1974, 1-11.

Orwin, C.S. and C.S. Orwin : *The Open-fields*. 1938 (Third Edition 1967, Oxford, 196 p.)

Petrini, Leandro : Un convegno di geografia agraria dei paesi mediterranei. *Rivista Geografica Italiana*, LXXVIII. 1971, 443-447.

Quaini, Massimo : Per lo studio dei caratteri originali del paesaggio agrario della Liguria pre-industriale. *I Paesaggi rurali europei*. Deputazione di Storia Patria per l'Umbria. Appendici al Bollettino N. 12, 1975, 45-470.

Ribeiro, Orlando : Réflexions sur les paysages agraires de la Méditerranée : le déclin d'une civilisation. *I Paesaggi rurali europei*. Deputazione di Storia Patria per l'Umbria. Appendici al Bollettino N. 12, 1975, 545-564.

Romeo, Rosario : *Il Risorgimento in Sicilia*. Laterza, 1970, 420 p.

Rossi-Doria, Manlio : Struttura e problemi dell'agricoltura meridionale. Relazione letta al Convegno di Studi sui Problemi del Mezzogiorno, Bari, 1944 (Cos'è il Mezzogiorno agrario, Caizzi (ed.) *Nuova Antologia della Questione Meridionale*. Edizioni di Comunità, 1975, 165-192.

Ruggieri, Michelangelo : I terreni abbandonati, nuovo componente del paesaggio. *Bollettino della Società Geografica Italiana*, Serie X, vol. V, 1976, 441-464.

Sereni, Emilio : *Storia del paesaggio agrario italiano*. Laterza, 1961, 439 p.

Sereni, Emilio : Agricoltura e mondo rurale. *Storia d'Italia*. I. Einaudi, 1972, 133-252.

Sprengel, Udo : *Die Wanderherdenwirtschaft im mittel-und südostitalienischen Raum*. Marburger Geographische Schriften Heft 51, 1971, 265 p.

竹内啓一 イタリアにおける農村集落の諸類型「経済地理学年報」D111 1965. 33-47.

Takeuchi, Keiichi : L'openfield et l'enclos dans le paysage rural de l'Italia. *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, Vol. 4, No. 1, 1968, 43-56.

竹内啓一 定住化――生活様式論として「一橋論叢」VXI 1969.

竹内啓一 アペニン山地中南部におけるトランスヒュマンスの衰退過程についての若干の考察「一橋論叢」VXXII

Uhlig, Harold : Old Hamlets with Infield and Outfield Systems in Western and Central Europe. *Geografiska Annaler*, Vol. XLIII, 1961, 285-312

Villari, Rosario : *Mezzogiorno e contadino nell'età moderna*. Laterza, 1961, 288 p.

Vitte, Pierre : Evolution d'un milieu montagnard : l'exemple du versant sud du Gran Sasso d'Italia. *I Paesaggi Rurali Europei*. Deputazione di Storia Patria per l'Umbria. Appendici al Bollettino N. 12, 1975, 507-516.

Wirth, Eugen : *Theoretische Geographie. Grundzüge einer Theoretischen Kulturgeographie*. B.G. Teubner, 1979.

* 本稿は昭和53・54年度科学研究費補助金（総合研究A，研究代表者 竹内啓一，課題「地中海地域における集落の形成と発達に関する比較研究」）による研究成果の一部である。